

交流の充実

相互参観・体験
実践事例の共有

合同研修会・協議会
情報交換会

架け橋期の
カリキュラム検討

県幼児教育アドバイザーを活用した保幼小接続研修会
～幼児教育と小学校教育の円滑な接続
神栖市架け橋カリキュラムの実践へ～

神栖市

幼児教育と小学校教育の円滑な接続を推進するため、昨年度に作成した「神栖市架け橋カリキュラム」の活用方法について、茨城県幼児教育アドバイザーである助川公継先生を講師として、管理職向け研修会を企画した。

参加者 管理職（幼児教育施設、小学校）

準備物 神栖市架け橋カリキュラム、事前アンケート集計資料、講話資料

■講話「幼児教育と小学校教育の円滑な接続」

【講師：茨城女子短期大学 副学長 こども学科 教授 助川 公継 先生】

保幼小接続の現状と課題、幼児教育と小学校教育の特徴、架け橋期のカリキュラムの作成と神栖市で作成したカリキュラムの活用方法等詳しく解説していただいた。

○ **参加者の感想**

- ・子どもたちが、これまでにどのように学び、どのような力を培ってきたのか、どのような育ちのプロセスを経てきたのかをしっかりと理解した上で、学びがスムーズにつながるようにしていくことが大切だと感じた。
- ・幼児教育と小学校教育の違いを理解することが円滑な接続につながると感じた。
- ・「遊びは学び」という言葉が印象に残った。ねらいを明確にし、年間指導計画にも生かしていきたい。
- ・接続するには、交流や連携、そのためのカリキュラムが必要であり、一人一人の発達や学びの連続性を保障することにつながると感じた。

■グループ協議「これまでの実践及び今後の見通しについて」

参加者を小学校区ごとの8グループに分け、それぞれが取り組んでいる保幼小接続の実践について説明等を行い、今後の保幼小の接続に向けて考えを共有したり、協議したりしながら話し合いを行った。

○ **保幼小接続での課題や今後の見通し**

- ・1つの小学校に複数の幼児教育施設が関わるので、共通認識と理解が必要だと感じた。難しい部分もあると思うが、今後も接続に向けて意見交換をしていきたい。
- ・学区で相談しながらカリキュラムを作成することができれば、より効果的なカリキュラムになると思う。交流の計画を立てていきたい。
- ・学区で期待する子どもの姿を共有することで、育みたい資質・能力について考えを深めることができた。
- ・幼児教育で大切にしていることを小学校の先生方に説明する機会があってよかった。相互授業参観など考えていきたい。

今回の研修会では、幼児教育と小学校教育の円滑な接続について現状を把握し、接続のポイントについて理解を深めることができた。講話から、今後の「神栖市架け橋カリキュラム」を改善していく上での6つの視点が示されていたので、園で展開される活動や小学校での単元構成など各園所、各学校での取組をまとめ、今後に生かしていきたい。

交流の充実

相互参観・体験
実践事例の共有

合同研修会・協議会
情報交換会

架け橋期の
カリキュラム検討

幼児教育から小学校教育へのなめらかな接続に向けて ～鹿嶋市架け橋期カリキュラムを活用した実践～

鹿嶋市



鹿嶋市における幼児教育から小学校教育への円滑な接続を図るために、幼児教育の保育者と小学校教員が、互いの教育について理解することを促進し、それぞれの良さを取り入れた教育内容や方法の工夫及び改善、充実を図る。

参加者 公立幼：5名、公立認こ：1名、私立認こ：6名、公立保：3名、私立保：5名、
小学校：13名、幼児教育コーディネーター：2名

準備 参考資料「園・小学校の実践事例」「鹿嶋市架け橋期カリキュラム」

■グループ協議「鹿嶋市架け橋期カリキュラムを活用した実践」

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を手がかりとして、「幼児教育」「小学校教育」それぞれの良さを取り入れた活動を各小学校・園が事前に作成。それぞれの小学校、園での実践事例についてグループごとに共有し、共有した実践をもとに、幼稚園・保育園の活動が、小学校の教育にどのようにつながっていくのかを話し合った。

○ グループ協議で出た意見

- ・園で遊びの中で育まれた力が、小学校で「がんばろう」という意欲につながっていると感じた。
- ・園での遊びが生活科の授業に取り入れられていて、園と小学校のつながりや共通点が分かった。

○ 全体共有で出た意見

- ・子どもたち同士の交流は増えたが、職員間同士の交流は少ないので、今後増えていくと良い。
- ・それぞれのめあてを知っておくことが大切だと感じた。
- ・実際に交流をした後の子どもたちの生き生じた表情が、交流の大切さを教えてくれた。



■助言・指導 「幼児教育から小学校教育へのなめらかな接続に向けて」

○アドバイザー「全国幼児教育研究協会茨城支部参与 福田 洋子 先生」

保幼小連携は非常に大事なので、今後もより一層連携を進めてほしい。架け橋期カリキュラムは時代の変化とともに変わっていくものなので、子どもたちの実態に合わせて改善していく必要がある。

○講師「常磐短期大学 幼児教育保育学科 助教 宗次 直巳 先生」

保育と教育の質の向上のために、自分の指導を振り返ってほしい。交流して終わりではないので、今後も連携をしていってほしい。

研修の様子や研修後の振り返りから、保幼小で連携していくこと重要性を実感している様子が見られた。今後は、さらに中学校区ごとに連携を深めて、子どもたちの実態に合わせて鹿嶋市架け橋期カリキュラムの改善を図っていきたい。

保幼小接続体制の充実に向けた研修の工夫改善

牛久市

～架け橋期への理解を深める保幼小合同連絡会の実践～

参加者 幼児教育施設・小学校管理職 4・5歳児担当保育者・小学校1年担任（各1）
 変更点 今年度 合同連絡会2～3回開催（R5年度まで 年1回 4月に開催）
 定期異動・担当学年等の変更により、4月に再スタートとなる場合も多い点への
 アプローチとして、保幼小合同連絡会のアップデートを心掛けた。

■「担当者をつなぎ、学区内の接続を深める」

第1回保幼小合同連絡会（市中央生涯学習センター）

○うしくの幼児教育の再確認

「環境を通して遊ぶことから学ぶ」

参加者 63人（内訳 上記記載）

重 点 ・幼児教育の質の向上

成 果 ・保育への理解＜小学校＞と変化する

小学校教育への相互理解、アフターコロナでの交流活動の在り方

工夫点 ・家庭教育応援ナビ動画紹介（会場で動画視聴、各施設での研修等での活用依頼）

・「個別最適な学び」へつながる幼児教育への働きかけ

新規事業として幼児教育アドバイザーによる定期訪問

※参加者の声「接続計画についてのおおよその見通しをもつことができ、安心した。」



■「管理職を対象とした合同連絡会」

第2回保幼小合同連絡会（ひたち野うしく小学校）

○ 架け橋期の保育・教育の充実に向けた理論研修

茨城大学教育学部 教授 新井英靖先生講演

演題「個別最適化された学び」と「協働的な学び」

—令和の日本型学校教育への転換—

参加者 幼児教育施設・小学校 管理職（各1） 31人

内 容 ・一斉に学ぶ教室から抜け出す

・未来の学校、学習環境から考える「関心を育て社会・世界とつなぐ」ことの重要性

・不登校支援と幼児教育の接点

※参加者の声「新しい学校教育について情報を得られ、有意義な時間だった。」



◆市幼児教育アドバイザーの取組（学校と幼児教育施設の相互理解の手段として）

月1回の幼児教育施設訪問 → 保育の様子・小学校の様子を各園に伝える

4・5歳児担当者研修 → 小学校の取組の伝達、遊びの重要性の理解

※グループ協議 日常の製作活動に関する悩み事共有

※「遊びこむ経験」と「学びに向かう力」の関係（茨城大学教育学部 石田 修先生）

新型コロナウイルス感染症対策で停止していた各校・園での「交流」も、以前に戻すだけでなくコロナ禍での取組を生かした事例も見られる。学校と幼児教育施設の相互理解は、なお重要であり、理論的なアプローチも踏まえ、架け橋カリキュラムへとつなげていきたい。

幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けて ～幼児教育アドバイザーによる教職員研修会の実践を通して～

日立市



本市には、公立幼稚園 2 園、公立認定こども園 2 園、公立保育園 18 園、私立幼保連携型認定こども園 12 園、私立幼稚園 8 園、小学校 23 校、義務教育学校 1 校、特別支援学校 1 校ある。保育者と小学校教員の相互理解や保幼小の円滑な接続に向けて、夏季研修会を実施した。

参加者 公立幼：5 名、公立こ 4 名、公立保：14 名、私立保：10 名、私立幼：2 名、小学校：19 名、中学校 1 名 合計 55 名

■講話「保育者と小学校教員の相互理解、保幼小接続カリキュラムの改善」

【講師：茨城キリスト教大学文学部児童教育学科教授 飛田 隆 先生】

幼児教育（経験カリキュラム）と小学校教育（教科カリキュラム）の大きな違いを理解すること、そして幼児教育施設での遊びを通した関わり方と小学校以降の学校生活を通した子どもへの関わり方との違いを保育者と小学校教員が相互理解を図ることが、保幼小の円滑な接続につながるというお話をいただいた。



【幼児教育施設担当者】

- ・講義の中で幼児期の終わりまでに育ってほしい姿について具体的に説明があったので、幼児教育担当者と小学校教育担当者が共通理解を図るよい機会となった。
- ・就学前の関わり方や大切にしていこうことを改めて考える機会になり、保幼小接続に向けて理解を深めることができた。

【小学校教育担当者】

- ・架け橋期プログラムの実施に向けて、1 年生の教育課程を見直していかななくてはならないと感じた。保幼小の円滑な接続に向けて、今年度実施しているものもあるので、形にしていきたい。

■グループ協議「架け橋プログラム、保幼小連携についての課題と改善策」

グループごとに、架け橋プログラムや保幼小連携についての実情や課題について意見交換を行い、改善策についての検討を行った。

【幼児教育施設担当者】

- ・コロナ禍でなくなってしまった保幼小の連携を、今年度はつなげていきたいと思った。
- ・保幼小の連携を図ることができていない部分もあり、これを機に少しずつ交流ができたと思う。これからは、自分には何ができるのかを考えて子どもたちのために、できるところから取り組んでいきたい。



【小学校教育担当者】

- ・幼児教育との連携をさらに深めていきたい。幼稚園や保育園などと連携し、一緒に活動することで小一プログラムへの対応になるのではないかと感じた。
- ・幼稚園等の先生方と情報交換を図ることができ、よい機会となった。今後も保幼小と協力して、よりよい教育活動が進めていけるようにしていきたい。

今回の研修を通して、保育者と小学校教員が、それぞれの教育の違いについて相互理解を図る場を設定していくことの重要性を改めて実感した。本市では、市計画訪問や研修会、相互授業参観等で保幼小の円滑な接続に向けた取り組みを実施しているが、今後はさらに充実したものになるよう内容の見直しを図っていききたい。そして、架け橋期のカリキュラム作成に向けて、市として各園や各小学校にどのようなアプローチができるのかを検討していききたい。

架け橋期のカリキュラム作成に向けた基盤づくり

～県幼児教育アドバイザーを活用した合同研修会を通して～

稲敷市

昨年度、市保幼小連携・接続協議会を立ち上げ、合同研修会と合わせて市の保幼小の連携・接続体制が整った。今年度は、架け橋期のカリキュラムの作成を視野に入れたアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの見直しを目的に夏の合同研修会を実施した。県幼児教育アドバイザーの講話を通して先生方に幼児教育への理解を促し、保育者と小学校教員の情報交換をしながら特にスタートカリキュラムの見直しに重点を置いた協議を行った。

■講話「保育者と小学校教員の相互理解と保幼小接続カリキュラムの改善」

講師：県幼児教育アドバイザー 福田洋子先生

「学校種は変わるが、子供の発達や学びは連続している。」
「小学校教育をやりやすくするためには、細かいマナーやスキルをしつけるより資質・能力に関わる創造的な思考や主体的な態度を養うために教育課程や指導計画を連続的なものにする」という話があった。



○参加者の声

- ・ 幼児理解の重要性を改めて感じた。小学校接続に関して、ルールや文字の学びも大事だが、自主性や思いやる心など、非認知能力を伸ばしていきたい。
- ・ 園で育てている「自分で考えて行動していく」力を生かせるようにしたい。
- ・ 一人一人の発達をしっかり捉えていくことが大切と思った。教師のゆとりある関わりと一人一人の言動を見守ることが幼児理解につながることを学んだ。

■グループ協議(カリキュラムの改善、小学校区毎8グループ、参加者 39名)

- カリキュラムを持ち寄って情報交換しながら焦点を絞って協議した。今回の協議を足掛かりにカリキュラムを相互に見直し、修正しながら「架け橋期のカリキュラム」につなげていく。

○主な協議内容

- ・ 学ぶ力に関して…弾力的な時間割、文字の指導や鉛筆の持ち方、思いを伝えることなど。
- ・ 生活上の自立に関して…小学校ではあいさつの声が小さくなる、上級生の手伝いを少なくし、自立心を育む、身支度や整理整頓、トイレや水飲みの時間などについての連携など。
- ・ かかわる力に関して…入学時にリセットさせないようカリキュラムをもとに引き継ぐ。

○参加者の声

- ・ 園での子供の様子、今何を経験して成長しているか、今後の課題などを小学校の先生と話し合うことができてよかった。園で行っていたことが引き継がれていると感じた。
- ・ 小学校の先生の話聞いて「ここは園でもできるかも…」、「そこまではやらなくても…」と考えることができた。
- ・ 日常の疑問や課題などを共有して話し合えてよかった。年度末の引継ぎだけでなく、日々の参観や情報共有の場が増えていくといい。



私立幼児教育施設を含む市内全園と全小学校の参加で、情報交換しながら具体的な視点でざっくばらんに話し合いをすることにより相互理解が進んだ。今回の協議を各小学校区に持ち帰り、検討を重ね、より実効性のあるカリキュラムに改善していくようにしたい。

4月（授業参観）8月（管理職連絡協議会）

「幼保小架け橋プログラム」の視点から ～幼児教育と小学校教育の 学びと育ちをつなぐための授業参観から～

30th Anniversary

30th

ひとが咲くまち。ひたちなか

保育者や小学校教員が子どもたちの育ちや学びの理解を深められるように、幼児教育とのつながりが顕著に現れる、1年生スタート時期の4月に保育者による授業参観を実施した。後日そこでの授業や子どもの様子をもとに、幼児期に育まれたことを踏まえた指導の工夫について管理職連絡協議会で研修会、協議会を実施した。

■授業参観

「発達段階に合った指導の大切さ」

目的：学びの連続性を意識した保育の実践や、架け橋期のカリキュラムの作成や見直しができるように

対象：市内全幼児教育施設の管理職及び保幼小接続コーディネーター（参加延べ人数：128名）

～参加者からの意見～

- ・遊びからの学びも、授業からの学びも「考える力」は大切だと感じた。
- ・発達段階に応じた指導について改めて考えた。
- ・気付きを促す教師の援助は同じだと思った。



■合同研修会・協議会

「子どもの育ちと学びをつなぐ架け橋プログラム」

目的：幼児期に育まれた力や園で学んだ経験を小学校の学びにいかしていくために

対象：市内幼児教育施設管理職36名 小・義務教育学校管理職18名

○講話

茨城県教育庁総務企画部生涯学習課

就学前教育・家庭教育推進室 指導主事 中庭 朋子 先生

○協議

「子どもの心が動く学校探検とは？」

- ・スタートカリキュラムの考え方を踏まえた学校探検とは

～参加者からの意見～

- ・園での様々な経験がいかせるような環境の設定が大切だと感じた。
- ・子どもが主体の活動を念頭に置いて、今までの活動について見直しをしていきたい。
- ・もっと子どもの思いに耳を傾けていきたいと思った。



ひたちなか市の保幼小連携の様々な取組が、入学時の学校適応でとどまらず、子どもたちの育ちと学びをつなげていけるようにしていきたい。教職員が、これまでやってきたことを大きく変えることなく、新たな視点をもち意識しながら、指導の改善・充実を図っていけるように、「架け橋期」の理解の促進に今後も努めていき、更には架け橋カリキュラムを幼保小の職員で一緒に作成していきます。

交流の充実

相互参観・体験
実践事例の共有

合同研修会・協議会
情報交換会

架け橋期の
カリキュラム検討

幼保小架け橋カリキュラムの理解と保幼小の相互理解に向けて

～令和6年度 市保幼小接続担当者研修会での実践を通して～

常陸太田市

令和6年8月8日（木）に、保幼小コーディネーター及び園内リーダーを対象に、茨城県幼児教育アドバイザー福田洋子先生を招き、幼保小架け橋カリキュラムの理解や、保幼小相互理解、情報共有を目的とした「市保幼小接続研修会」を実施した。

【参加者】保幼小接続コーディネーター（小学校）9名

園内リーダー（公立幼稚園2名、公立認定こども園5名、公立保育園2名、
私立認定こども園1名、私立保育園1名）

■講話 「幼保小の架け橋カリキュラムについて」

県幼児教育アドバイザー

公益社団法人 全国幼児教育研究協会茨城支部 参与 福田洋子 先生

○主な講話の内容

- ・ 幼児教育の充実のための基本的な視点
- ・ 環境を通して行う教育の特質
- ・ 小学校教育との接続にあたっての留意事項
- ・ 幼保小架け橋プログラムのねらい等

○参加者の感想から

- ・ 「環境を通して行う幼児期の教育の在り方について知ることができた。子供への寄り添い方を、先生のお話を参考に小学校においても実践していきたい。」
- ・ 「子供たちが遊びに没頭できる環境の構成や、保育士の援助が大切であると再認識しました。自分の保育を振り返り、幼児理解から保育を見直していきたい。」

■グループ協議・情報交換

※地区ごとにグループを編成

①幼保小の架け橋カリキュラムについての情報交換

- ・ 「講話を聞いて、理解が進んだこと」「課題と感じたこと」「質問したいこと」を付箋に書き、協議する。

②架け橋期における取組について

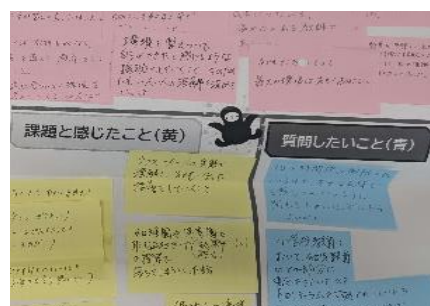
- ・ 各園や各校のアプローチカリキュラム及びスタートカリキュラムをもとにした情報共有及び改善等
- ・ 現在実施している連携以外で、今後連携が可能な取組について

○参加者の感想から

- ・ 「同じ地域の小学校の先生方と、普段感じている思いや課題などの話をする事で、共感したり、新たな情報を得たりすることができ、大変良い機会となった。」
- ・ 「『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』をもう一度捉え直し、これからの学習や生活の中で意識し、実践していきたい。」



【写真①】グループ協議の様子



【写真②】グループ協議でのワークシート

県幼児教育アドバイザーの講話を基に幼保小の教職員が協議及び情報共有できたことは、「架け橋期」の理解や今後の取組に向けて有意義な機会となった。今後は、地区ごとに各園、各校ごとの実態に合わせた情報共有の在り方が課題である。

幼児教育と小学校教育の接続のための研修会 ～架け橋期のカリキュラムの改善に向けて～

つくばみらい市

令和6年10月31日（木）に、保幼小接続コーディネーター及び園内リーダー等を対象に、つくばみらい市における幼児教育と小学校教育の円滑な接続を推進することを目的とした「幼児教育と小学校教育の接続のための研修会」を実施した。

参加者 公立幼：3名、公立保：4名、私立保：4名、私立こ：2名、私立幼：1名
小学校：8名
準備 持参資料：茨城県保幼小接続カリキュラム
子どもがのびのびと遊んだり学んだりしている写真

■講話 県幼児教育アドバイザー 飛田 隆 先生 「架け橋期のカリキュラムの改善に向けて」

1 架け橋期のカリキュラムとは

- ・接続カリキュラムと架け橋カリキュラムの違い
- ・文部科学省「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き」
- ・「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」「小学校学習指導要領」

2 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ・遊びの中の学び
- ・子どもの姿の丁寧な見取り
- ・幼児教育と小学校教育の共通点



■協議における主な意見

協議の形式:グループ協議

協議の視点:「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をもとに、各自が持参した写真から「子どもの育ちや学び」について考え、秋の架け橋期のカリキュラムを作成する。

○幼児教育施設から

- ・普段の保育計画でも大切にしている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や育みたい資質能力について再認識することができた。
- ・協議をする中で、育んでいきたい項目やねらいは幼児教育と小学校教育では大きく変わらず、共通点が多いことに気がついた。

○小学校教員から

- ・保幼小の接続期の重要性について改めて理解することができた。1年生に対する指導のヒントとなるものがたくさんあったので、今後の指導に活かしていきたい。

本研修会実施により、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の大切さを再認識し、幼児教育と小学校教育の相互理解や連携につなげることができた。今後も、保育者と教員が共に協議したり情報交換したりする機会を設定し、市の幼児教育と小学校教育の接続・連携を図っていききたい。

交流の充実

相互参観・体験
実践事例の共有

合同研修会・協議会
情報交換会

架け橋期の
カリキュラム検討

接続カリキュラムの活用・改善に向けた取組

～取手市保幼小連絡協議会の運営～



取手市では、26 幼児教育施設と 14 小学校の滑らかな接続を重視して、幼児教育と小学校教育の学びをつなげるように連絡協議会を実施している。第 1 回連絡協議会では、県幼児教育アドバイザーを招き、保幼小接続カリキュラムの改善について協議した。

【第 1 回 取手市保幼小連絡協議会】

令和 6 年 5 月 2 9 日 (水)

テーマ 「保幼小接続カリキュラムの改善」

講師 福田 洋子先生

公益社団法人全国幼児教育研究協会茨城支部参与
前常盤短期大学教授・副学長

内 容 「環境を通して行う教育の特質」や「小学校教育と幼児教育の接続に当たっての留意事項」等、保幼小接続カリキュラムの改善のポイントについて講話をいただいた。講話では、保育現場の映像を含め、子どもの姿を中心とした接続について考えるきっかけとなった。

研究協議から

- ・ 小学校への引継ぎで幼児教育施設に行ったとき、入学直前の幼児の姿を見せてもらい、小学校での支援の参考になった。
- ・ 幼児教育施設を卒業した子どもたちの小学校でがんばっている姿を見たい。卒業後も情報共有したい。
- ・ 保育者の先生の「幼児を待つ」姿は、小学校の先生も参考になる。
- ・ 「幼児期の遊びが小学校の学びにどうつながるか」学びの連続について理解した。
- ・ 「探究的な学び」は、幼児期の「知りたい、関わりたい」という気持ちを小学校の学びにつなげることが重要である。



【第 2 回 取手市保幼小連絡協議会】 令和 7 年 1 月予定

協議内容 「保育者と小学校教員との情報共有・意見交換」

・ 幼児の入学に向けた具体的な情報共有と次年度の年間計画シートを作成する。

準備物 説明資料 (PowerPoint)、取手市保幼小接続年間計画シート

取手市保幼小引継ぎシート、各施設の年間計画・行事予定表等

幼児教育（遊びを通した学び）を理解し、その学びをどのように小学校教育に生かすことができるかについて理解を深めることができた。保育参観や授業参観を通して、子ども同士や職員間の交流を充実させるとともに、保幼小連携・接続の推進につながった。今後も、幼児教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるように合同研修会を開催する。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を手掛かりに 「目指す子どもの姿」について語り合う研修会

銚田市



市内各エリア（中学校区）では、年々工夫改善が進み、相互参観、交流活動等の充実が図られてきている。今後、架け橋期のカリキュラム作成を進めていくために、保幼小接続担当者の理解を図り、具体的なイメージをもつことができるように本研修会を実施した。

参加者 公立幼：4名、公立保：2名、私立こ：2名、私立保：4名、小学校：7名

■研修1 保幼小の連携・接続に関する取組について

各エリア（中学校区）において、「目指す子どもの姿」を共有しながら、以下のことを協議

- (1) ①子ども同士の交流②保育者・教員の連携 の提案
- (2) ①②を「すぐ取り組めること」と「実施するために工夫改善が必要なこと」に分け、実施に向けた協議

＜主な意見＞

- ・小学校スタート期の参観は前年度中に計画立案
→市内全小学校で実施（4・5月）
- ・各保幼小で情報発信し、保護者・地域へ取組を周知
- ・参観後の情報交換、情報共有を大切にしたい
- ・幼児の小学校生活への不安解消につなげたい



■研修2 「目指す子どもの姿」をもとに架け橋期のカリキュラムをイメージする

- (1) 「目指す子どもの姿」と、どんな活動（小学校は「生活科」を中心）がつながるか具体的な場面で考える
- (2) 活動における「環境の構成」や「先生との関わり」等配慮事項を考える

各幼児教育施設・小学校で作成後、各エリア（中学校区）で情報交換し、共有する

＜参考資料＞

- ・大館市架け橋期のカリキュラム（令和6年3月時点）

＜例＞

- ①「自信をもって意欲的に活動に取り組もうとする」 カリキュラムの検討
 - ・活動：活動当番活動、帰りの会での一日の振り返りの発表
 - ・配慮：できたら褒め、次につなげる
- ②「小学校での過ごし方に慣れ、楽しく学校生活を送ろうとする」
 - ・活動：生活科「学校たんけん」
 - ・配慮：幼児教育施設での経験を考慮し、サポートしすぎない



市内の幼児教育施設と小学校が、架け橋期における「目指す子どもの姿」を共有することで、これまでも実施してきた相互参観、保育体験、交流活動等がより充実したものになっている。これらの実践を積み重ね、架け橋期のカリキュラムへとつなげていきたい。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」を 共通言語にして協議し考える ～夏季休業中における保幼小接続研修会の実践～

河内町



河内町には、1つの義務教育学校と1つの公立こども園があり、道路をはさんで隣接している。そこで、「保幼小接続の質の向上」を目指し、8月1日に全教職員（前期課程・後期課程・こども園職員）を対象として研修会を開催した。研修会では、県幼児教育アドバイザーによる講話の後、写真を基に話し合うグループ協議を7グループに分かれて行った。

参加者 公立こ：7名、義務教育学校：27名、教育委員会：2名、教育事務所：1名

準備 モニター、事後アンケート入力用二次元バーコード、
グループごと（幼児が活動している写真10枚、模造紙、マジック、のり）

■ 県幼児教育アドバイザー（神永直美先生）による講話 「保幼小の接続の質の向上に向けて」

- 課題の把握（河内町の現状）
- 講話①「保幼小の連携・接続の質の向上に向けて
何が必要か」
 - ・ 連携・接続の必要感、必然性についての共有
 - ・ 「架け橋プログラム」「架け橋カリキュラム」とは
- 講話②「横のつながりと縦のつながりの強化」
 - ・ 幼児教育施設の横のつながり ・ 幼保小の合同研修
 - ・ 幼児教育施設での小学校の教科研修 ・ 持続可能な体制の構築
 - ・ 幼児教育の遊びと小学校教育の学びの特性の理解



■ グループ協議「写真を基に、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿のうち、 どの姿が見られるか、その理由も話し合い、模造紙に記載していく」

- 幼児教育施設保育者の意見から
 - ・ 普段お話しする機会がもてない先生方と一緒に協議することで、違う視点からの発見があり、自分にとっても視野が広がった。
 - ・ もっと些細なことも話ができる関係性が接続には必要なのではないかと思った。
 - ・ 普段の保育の中で、自分たちが考えていることを学校の先生と共有でき、有意義な時間だった。
- 義務教育学校教員の意見から
 - ・ 他の班の発表も聞けたので、自分たちの班が考えなかった見方を知ることができ、視野を広げることができた。
 - ・ 自分の想像だけでは思いつかない子どもたちの発想や捉え方を知ることができ、とても有意義な時間だった。
 - ・ 「遊び」の中から10の姿を見つけ出す活動を通して、遊びに対する見方が変わった。



昨年度は管理職対象の研修会を開催し、今年度は全教職員に対象を広げて研修会を開催した。前期課程・後期課程・こども園の教職員で7グループを作り、写真を基に協議する機会を設定したことで、お互いの教育をリスペクトし、視野を広げるきっかけになった。今後はこども園と学校が独自のアイデアで、さらに自由に交流できるように支援していきたい。

幼児期の育ちと小学校の学びをつなぐ保幼小合同研修会

～「幼児教育」と「学校教育」のつながり（年長児～1年生へ）の
ワークシート作成を通して～

小美玉市

本市の現状：公立幼稚園 2 園、私立認定こども幼稚園 2 園、私立認定こども保育園 1 園、私立幼保連携型認定こども園 2 園、私立保育園 8 園があり、それぞれ特色ある取組を行っている。一つの小学校には複数の園から入学してくる。各幼児教育施設間の段差、幼児教育施設と小学校との段差を滑らかにしていくことが、架け橋カリキュラム作成における大きな課題となっている。

課題への取組：各園、各小・義務教育学校に、4 月～3 月までの 1 年間の活動を写真で紹介する架け橋カリキュラムデザインシート【資料 1】を昨年度末に作成していただいた。それを基に今年度、保幼小合同研修会を夏休みに実施し、「幼児教育」と「学校教育」のつながり（年長児～1 年生へ）イメージ図【資料 2】を小学校区ごとに話し合いながら作成していただいた。

参加者：小・義務教育学校 1 年担任（接続コーディネーター）7 名、市内各幼児教育担当 16 名、小美玉市幼児教育アドバイザー、担当指導主事

1 夏季保幼小合同研修会

(1) 文部科学省動画「遊びは学び 学びは遊び～やってみたいが学びの芽～を視聴

「幼児教育」と「小学校教育」がつながるってどういうこと？の紹介

(2) グループワーク：「幼児教育」と「学校教育」のつながり（年長児～1 年生へ）イメージ図の作成【資料 2・3】



【資料 1】



【資料 2】



【資料 3】

2 保幼小相互参観実施：私立保育園等 11 園、公立幼稚園 2 園、小・義務教育学校 7 校の協力による相互参観（6 月～12 月）実施

【まとめ】

小学校区ごとに架け橋カリキュラムデザインシート（各園各小・義務教育学校で作成）をもとに、幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿のイメージ図を作る作業を通して、先生方から、「互いの疑問を話し合い、情報交換ができて良かった」という感想が聞かれた。グループワークを実施後、保育参観や 1 年生の授業参観を行った先生方からは、「保育の体験が小学校等の学びにどうつながるのか具体的にイメージできた。」という感想も多くあった。遊びの中の育ち（学びの芽）の大切さとそれが小学校 1 年生のどんな活動につながるのか理解を深めることができた。しかし、一つの小学校に、多方面の幼児教育施設から入学してくるため、架け橋カリキュラムをどのように作成していくかまだ多くの課題が残っている。

交流の充実

相互参観・体験
実践事例の共有

合同研修会・協議会
情報交換会

架け橋期の
カリキュラム検討

幼児教育施設と小学校との連携・接続の推進 ～「本市における接続の要点」の研修をととして～

北茨城市

保幼小接続について本市の課題は、児童発達支援、放課後等デイサービス事業と幼稚園・保育所、小学校との連携が十分ではないことが挙げられ、昨年度に続き今年度も「環境の一貫性」をテーマに研修を実施した。今年度は特に演習を取り入れた講義を実施していただいた。また、より多くの方が研修できるように、参加対象者を広げて実施した。

参加者 公立幼児教育施設：1名 私立幼児教育施設：12名 小学校：17名

中学校：9名 特別支援学校：1名 幼児教育相談室：2名

社会福祉協議会：2名 健康づくり支援課：3名 子育て支援課：3名

準備 幼児教育施設にはアプローチカリキュラム、小学校にはスタートカリキュラムを持参していただくよう通知し、グループ協議で活用した。

■講義・演習「幼稚園・保育所と小学校の接続－その要点 北茨城市の場合」

本市の早期療育指導支援システムでご指導いただいている東北福祉大学の三浦 剛 教授を講師としてお招きし、60 分間の講話を行っていただいた。子どもが安心して生活するために見通しのきく環境が大切であり、そのためには保幼小で一貫性のある環境を整備する必要があるとのお話をいただいた。また、講話の途中で演習を随時取り入れていただき、より具体的な対応について研修を行うことができた。

※参加者の感想

- ・『気になる子どもがその行動に移るきっかけは何か』を考えることの重要性を再確認した。特性だから…と、落ち着きのなさを子ども側の責任にしていなかったか、見通しのきく一貫性の高い環境を整えていたか、適切にほめていたかなど、今回学んだことをもとに園内でも話し合い、子ども達により良い保育を行っていききたいと思った。(幼児教育施設担当者)
- ・「困った行動をする」のは教師の行動次第、「見通しがきかない環境」をつくってしまうのも教師側の問題など、学級のルールで大切なことを理解することができた。一貫性の高い環境をつくっていききたいと思う。(小学校担当者)

■グループ協議「保幼小連携・接続に係る課題と方策」

参加者を中学校区ごとの4グループに分け、それぞれが作成しているカリキュラムの説明をととして、保幼小連携・接続に係る課題と方策について協議を行った。

※協議における主な意見

○幼児教育施設担当者から

- ・園児が使用している教材や1年生の教材を持ち寄り、実際に見ながら連携を図っていききたい。
- ・幼稚園から小学校へ授業参観の依頼をし、子供を直に見て理解する場を設けていきたい。

○小学校担当者から

- ・一人の子に対して、保幼から中学まで情報を共有できるようなものがあってもよい。
- ・引継ぎの内容を年度初めの生活科の学習に生かしていきたい。
- ・引継ぎでは良くない情報（保護者対応も含め）もざっくばらんに伝えてほしい。

今回の研修をととして、子供たちのためには見通しがきく環境を整備する必要性への理解が深まった。今後も子供たちが不安なく生活できるよう、保幼小の連携を進めていきたい。また、今回は中学校勤務の初任者も初任者研修の一環として参加してもらい、多くの学びを得ていた。保幼小だけでなく、中学校も含めた連携・接続についても推進していきたい。

幼児教育と小学校教育接続のための協議会

～担当者部会の実践から～

水戸市

本協議会は、市内幼児教育施設・保育施設（公立 21 園、私立 66 園）と小学校・義務教育学校（34 校）で構成し、管理職部会と担当者部会を設けている。更に、全体組織を 5 ブロックに分け、大きい組織の連携の効率化を図っている。本年度は担当者部会を 9 月と 10 月に、管理職部会を 11 月に開催した。

担当者部会は人数が多いため、B・D・E ブロックを 9 月 17 日に、A・C ブロックを 10 月 4 日に開催日を分けて実施した。参加者は小学校・義務教育学校が 34 校中 32 校、公立幼児教育・保育施設が 21 園中 20 園、私立幼児教育・保育施設が 66 園中 35 園であった。

■ 講話

講話内容：「幼保小の架け橋プログラムについて」

講師：水戸市総合教育研究所 秋山 敦子 指導主事

架け橋カリキュラム作成に向け、本市の実態の説明、架け橋プログラムについての説明があった。また、「小学校生活への適応」から「学びの連続」へと、大切にしたい視点の解説があった。



■ グループ協議

「架け橋プログラムを念頭に置いて、現在の状況の把握と今後の展開について」

○ 幼児教育施設・保育施設保育者から

- ・水戸市内には公立、私立の様々な幼児教育施設・保育施設がある。それぞれの施設の考え方に差が大きいことが課題と思った。
- ・「連携、交流」から「学びの連続」へ意識を変えていくため、職員全体で学びの連続性について意見を交わしながら、カリキュラムを考えていきたい。

○ 小学校教員から

- ・本校では以前から保幼との連携が密に行われてきた。今年度は付けたい力、学びを中心にシャボン玉遊びを行った。
- ・もっと小学校が保幼に寄り添っていくほうが良いと思った。
- ・遊びを通して学んできた子どもたちを、協働的な学びにつないでいく視点が大切だと感じた。



○ アンケート結果から

- ・保幼小とも、授業や保育参観、各種行事での連携は十分行われ、積極的に参加している。連携のための会議も行われているが、架け橋カリキュラムについての話し合いはまだ十分ではない。今後プロジェクト会議から架け橋カリキュラムの検討に入りたい。

- ・本市では架け橋カリキュラム作成に向けたプロジェクトがまだ動いていない。しかしながら、現在も保幼小の連携は十分行われている。この連携を架け橋カリキュラム作成につなげていきたい。
- ・本市の幼児教育施設は 75% が私立施設である。私立施設と小学校、私立施設と公立施設をどのようにつなげていくかが今後の課題である。

保幼小接続のための連絡協議会

笠間市

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を市内各幼児教育施設担当者から、学区の小・義務教育学校教員に説明してもらったことを踏まえ、スタートカリキュラムの加筆・修正を行った。スタートカリキュラムを実施した成果・課題を協議し、接続カリキュラムについて協議する。

参加者 保育者14名 小学校教員：11名

■教育長講話 「接続期の教育の重要性」

教育基本法の位置づけ→第11条・・・幼児教育の充実
小1プロブレム

家庭教育の弱体化→親を教育する機会が学校に依存
家庭教育学級で親を教育する必要がある
就学前に身に付けさせたい力

- 人の話を聞く・・・相手の思いがわかる
- 自分の思いを言葉にして伝える。



■協議における主な意見

スタートカリキュラムを実施しての成果・課題

○成果

- ・スムーズに入学後の生活を送ることができた。
- ・幼児教育施設と小学校の時間の動きの違いを気を付けてスタートができた。
- ・NHK for School の活用により、児童は関心を持って、学校生活を送ることができた。
- ・入学前の保護者説明会を有効に使い、保幼小接続コーディネーターと教務主任の連携が進んだ。



○課題

- ・和式トイレの指導→幼児教育施設は洋式のみ
- ・1学年担当者が幼児教育施設と連携する必要がある。
- ・水道の使い方→幼児教育施設は自動または上下に動かすタイプ。ひねって水を出す動作の指導が必要。
- ・えんぴつの持ち方を直すのが難しい。
- ・学校という環境に慣れない児童がいるため、児童の実態に合わせた学習内容や時間割の工夫が必要である。



保育者は、卒園児の小学校での様子が気になっている。小・義務教育学校には、保育者が卒園児の様子を見る機会が可能な場合、学区内幼児教育施設に計画訪問の案内に加えて送付のお願いをした。幼児教育施設は施設長判断になるため、感染症が出た際には施設を休園する必要がある。よって公開保育が難しいことが現状であることがわかった。

保幼小の連携を推進するための、幼児教育施設、小学校 職員との交流について ～小学校1年生に関する情報交換会～

龍ヶ崎市

参加者：幼児教育施設 31名 小学校 24名
 準備物：参考資料「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」
 小学校での児童の様子をまとめた学校ごとの掲示物
 教育委員会作成資料

■「幼児教育施設職員と小学校職員による情報交換会」

小学校入学から2か月を経た6月、幼児教育施設と小学校の関係職員による、情報交換会を実施した。事前に、小学校職員に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を改めて確認してもらうことで、共通した視点から子供の成長について情報交換をすることができるようにした。幼児教育施設職員には、当日掲示した小学校での子供の活動の様子を参考に、小学校からの説明を聞いてもらうことで、小学校のカリキュラムへの理解を促した。

情報交換に際しては、教育委員会作成の資料をもとに情報交換を行うことで、幼児教育施設での学びや体験活動、その際に見られた子供の様子、身に付けた力や具体的な支援の内容などについて活発な話し合いが行われ、今後の教育活動や支援について考える機会とすることができた。

■情報交換会を施して

○ 幼児教育施設職員から

- ・卒園した子供の様子を知ることができてよかった。
- ・小学校の授業を参観する機会をもっと増やしていけるとよい。
小学校からも見に来ていただきたい。
- ・架け橋プログラムについて共通理解をして、保幼小連携をより一層進めていく必要がある。

○ 小学校教員の意見から

- ・幼児教育施設の先生方の話を伺えて、大変参考になった。
- ・幼児教育施設の方から子供への支援方法について、具体的かつ実践的な助言を受けられてよかった。



まとめ

成果：情報交換会を通して、幼児教育施設や小学校で行っている学習や体験活動などについて知り、保幼小の連携を進めることができた。また、現在小学校生活の中で困難を抱えている児童について、幼児教育施設での関わり方を参考に、支援の方法を検討することができた。

課題：保幼小の連携を一層進めるため、市内小中学校で行っている「龍の子人づくり学習」や、「スタートカリキュラム」、「架け橋プログラム」について、幼児教育施設職員、小学校職員それぞれへの理解を図るべく、研修等を行っていく必要がある。

巡回相談で指導を受けている作業療法士から見た幼児理解について講話を聴く

行方市

行方市では、公認心理士による幼児教育施設・小中学校の「巡回相談」のほかに、令和3年度より作業療法士による巡回相談を開始した。本年度からは、理学療法士も同行した巡回相談を公立幼稚園・私立保育園・私立認定こども園・小学校で実施している。今回の幼児教育施設職員等合同研修会では、認定こども園園長・小学校の管理職にも参加いただいた。

■ 1 「作業療法士による巡回相談」

本年度の作業療法士による巡回訪問には、こども課担当・特別支援教育相談員・幼児教育アドバイザーに理学療法士が加わった。公立幼稚園3園・私立保育園5園・私立認定こども園4園・小学校4校を年2回（一部の保育園は1回）訪問し、保育・授業参観後、カンファレンスを行っている。幼児教育施設は主に5歳児の様子を参観している。カンファレンスは課題を抱える園児について担任より様子を聞き、作業療法士が専門的な立場より指導を行っている。

■ 2 講話「作業療法士から見た幼児理解について」

○幼児教育施設職員等合同研修会

- ・毎年夏に実施 令和6年7月30日（火）実施
- ・講師 アール医療専門職大学 准教授 坂本 晴美 先生（作業療法士）
- ・参加者 幼稚園11名 保育園5名 認定こども園10名 小学校11名 計37名

○講話内容

- ・作業療法士の役割・・・①より実践的に、園児児童の発達過程に必要な支援強化に携わること②より実践的に、園児児童の発達過程に必要な研究事業に積極的に参加すること③より実践的に、園児児童に関わる機関と協働し、必要な支援を園児児童・保護者に届ける。
- ・そのための手段・・・①時計描写 ②平均台 ③トンネルくぐり（体幹の安定性）
- ・脳：認知機能の仕組み・・・認知機能が「学習の土台」、前頭葉機能の関わり
- ・こころの脳を発達させるために重要な機能・・・「空間認知能力」
- ・自分が認知している物事を客観的に把握し、コントロールすること…「メタ認知」
- ・「飛驒モデル」・・・子どもの学習のつまずきや悩みに寄り添う作業療法士の部屋設置



これまで幼保小の連携・接続の講演会を2年連続で行ってきた。特に4歳児・5歳児のみ在籍の本市の幼稚園・小中学生を指導している小学校の先生方に新たな知識について触れていただきたくて、このような趣旨の研修会を開催した。その結果、作業療法士の役割とは何か、空間認知能力・メタ認知等の脳科学についても関心をもつ先生方が増えた。

坂東市保幼小接続担当者研修会の実施 ～特別な配慮を必要とする子どもへの支援について～

坂東市



概要：子どもの発達障害が増加傾向にある中で、保幼小の接続の観点からも、特別な配慮を必要とする子どもへの支援については、情報共有・共通理解が不可欠になっている。そこで、茨城県幼児教育アドバイザーの先生を講師に迎え、特別な配慮を必要とする子どもへの支援に関する講話を聞き、小学校とその近隣園ごとのグループ協議を行った。

参加者：公立幼：1名、私立幼：1名、公立こ：2名、私立こ：5名

私立保：1名、小学校：12名、市担当者：3名

準備：県幼児教育アドバイザー派遣事業への申請、講師との事前打合せ、市生涯学習課社会教育主事との連絡調整、市内幼児教育施設及び小学校への周知、持参資料

実施日：令和6年10月1日（火）

■講話「特別な配慮を必要とする子どもへの支援」

講師：県幼児教育アドバイザー

筑波大学医学医療系 准教授 水野 智美 先生

- 1 発達障害のある子どもはたくさんいる
- 2 保育・教育の現場での気になる子どもの例
- 3 発達障害のある子どもの支援の基本
- 4 「わかる環境」を作るための指示の仕方



※特別な配慮を必要とする子どもについて、具体的な事例を交えながらご講義いただいた。発達障害のある子どもに大切なのは、子どもがわかる環境を作ることである。そのためには、指示の仕方を工夫する必要があることを再認識した。また、障害のある子どもをもつ保護者の気持ちに寄り添い、「保護者の本音を待つこと」、いざという時に「保護者と手をつなぐ先生方の姿勢が大切であること」について、理解を深めることができた。また、グループ協議にもご参加いただき、励みになるご助言をいただいた。

■グループ協議「特別な配慮を必要とする子どもへの支援」

○幼児教育施設保育者の意見から

- ・就学支援や情報共有の方法について、小学校入学までにできることを見直したい。
- ・外国籍で支援が必要な子どもの引継ぎについても、抜けのないよう行う必要がある。

○小学校教員の意見から

- ・支援学級は子どもにも保護者にも良い面がたくさんある。どんなサポートが得られるか、園からも保護者に積極的に発信してもらえよう、今後も連携強化に努めていきたい。
- ・特別支援教育の視点から、幼児期から児童期へ姿をつなぐための保育や授業の工夫について協議することで、幼小担当者間の共通理解が深まるよい機会となった。

まとめ

幼児教育施設における特別支援教育へのニーズが増える中、関係職員が参集して悩みの共有や情報交換等ができたことは、大変有意義だった。外国籍で支援が必要な子どもも増加傾向にあるため、引き続き連携の意識を高め、今後の支援の方策に生かしていきたい。

石岡市保幼小接続担当者等合同研修会（①R6.5.30②R6.8.29） ～架け橋期の教育の充実について～

石岡市

石岡市（21 幼児教育施設及び 15 小学校）における保幼小の円滑な接続のため、合同研修会を 2 回実施した。第 1 回研修会にてアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムを用いて、同地区や就学先との情報交換を行った。第 1 回の際に「特別な配慮を必要とする子どもへの支援」や「保幼小の円滑な接続へ向けた幼児の引継ぎ」という要望があったことを踏まえ、第 2 回は「県幼児教育アドバイザー派遣事業」を活用して、研修会を開催した。

参加者 公立幼：無、公立保：4 名、私立幼・こ・保：16 名、小学校：15 名
市職員 7 名（子育て健康部・教育委員会）

準備 県幼児教育アドバイザー派遣事業への申請、講師との事前打ち合わせ
保幼小接続担当課（こども未来課・学校教育課）との連絡調整（生涯学習課）
市内幼児教育施設及び小学校への周知（生涯学習課）

■講話「特別な配慮を必要とする子どもへの支援(保幼小接続期)」 【講師：共栄大学教育学部教育学科 梶井 正紀 先生（茨城県 幼児教育アドバイザー）】

特別な配慮を必要とする子どもについて、まずは子どもの特徴をつかむことが重要とし、障害の特性を踏まえた支援（かんしゃくへの対応等）だけでなく、保護者への支援についても、分かりやすくご講義いただいた。

さらに、幼児期の指導のポイントを提示していただき、幼児期（幼児期の学び）と学童期（小学校での学び）の連続性・一貫性の確保の点から、幼児教育施設、学校、保護者が子どもの様子について共有し、子ども本人や保護者の考えを小学校に引き継ぐことの大切さについても講義いただいた。



■グループ協議「特別な配慮を必要とする子どもへの支援について」

保育者と教員の混合グループにより、協議を行った。同地区や就学先以外の幼児教育施設や小学校の様子も知りたいと要望があったため、第 1 回は同地区や就学先、第 2 回は、同地区や就学先でないグループ編成をし、協議を行った。講師の梶井先生にも参加していただき、指導助言をしていただいた。



- 幼児教育施設保育者のアンケートから
 - ・ 小学校の授業の内容等を聞くことができ、有意義な情報交換ができた。小学校の先生がどんな事を思っているのか知ることができた。
 - ・ 色々な支援方法を知ることができ、実際に園でも取り入れていきたい。
- 小学校教員のアンケートから
 - ・ 保護者支援の仕方について、参考になった。
 - ・ 幼児教育施設の先生方から配慮を要する子どもへの対応を伺うことができ、参考になった。

- ・ 架け橋期（幼児教育と小学校教育）における学びの重要性を、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムを用いて情報交換を行うことで、再認識することができた。
- ・ 特別な配慮を必要とする子どもだけでなく、家庭に対しても連続した支援を行っていきたい。

保幼小中連携・接続のための合同研修会 発達段階に応じた幼児児童生徒の理解・支援について ～見通しをもたせる手立てや教材教具の工夫～

城里町



城里町では、保幼小中連携・接続として、幼児教育施設職員、小中学校教員、適応指導教室相談員等の合計 38 名が参加し、合同研修会を行った。水戸飯富特別支援学校の先生を講師にお迎えし、ユニバーサルデザインを意識した環境整備や教材教具の講話を聞いた。研修の中で、困りの体験やそれぞれの立場での関わり、子どもたちの成長の情報交換を行った。

■「困りを体験しよう」

集団生活においてどのように伝えれば相手が分かりやすいかを知るために、ペアで図形伝達ゲームを行いました。形、大きさ、位置を的確に伝えるためのコツを教えていただき、普段の子どもたちへの指示の出し方を振り返ることができました。

また、集中できる環境作りのポイントを教えていただいたり、LD の読字障害体験から、子ども自身の困りの実際を知りました。

UD 教材としては、幼児期には具体物を使って自分で操作したり音が鳴ったりするような工夫、児童期には図や表を使った伝え方で本人の得意な部分を生かせる工夫、生徒期には積極的な ICT 活用と思春期の心理に配慮した工夫等、発達段階に応じた教材が一部だけでなく全体への使いやすい教材になることを知りました。



■「保幼小中教職員でのグループ協議、情報交換」 参加者の意見より

○ 困り感をもつ子どもへの支援について

- ・教員がどのように支援したらいいか困っているのではなく、子ども自身がどうしていいかわからなくて困っていることを知った。
- ・注意されているのを楽しんでいるかのような行動は、関わってほしい、注目してほしい気持ちの表れだった。
- ・周囲の子どもたちへも配慮しながら支援しなくてはいけない。小学校高学年から中学校では自分のことに集中できるが、幼児同士ではできない子に注目するので難しい。

○ 発達段階に応じた支援と引き継ぎの実際

- ・小学校（中学校）入学までに身につけてほしいことはどんなことかについて、各グループ内で情報共有した。家庭への協力呼びかけも必要だと感じる。
- ・有効な手立ての情報を引き継ぎ時に共有する。そのままの手立てを活用するのではなく、身についた力に応じて工夫をしている。
- ・言葉＋視覚的な補助（絵、図、文字等）での安心感を与え、子ども自身が使いこなせるツールを引き継げるようにする。



校種の違う職員が一緒に研修する機会を毎年度設定しているが、今年度は特に中学校の先生方の積極的な参加から、幅広い町内ネットワーク構築の第一歩につながった。グループ協議では、数年後の子どもたちの様子を話し合う場面があり、町内の子どもたちをみんなで育てているという意識の深まりが感じられる研修となった。年度内に全園、全校で相互授業参観を実施し、お互いの普段の関わりや支援の工夫から相乗効果が上がるようにしていきたい。

架け橋期のカリキュラム検討に向けた 「先生のかかわり」や「環境」について考える ～特別支援教育合同研修会の実践から～

大洗町

6月：保幼小中合同特別支援教育研修会

ねらい 特別支援教育の考えから、架け橋期について考え、架け橋期についての理解を深める

参加者 公立幼：2名、私立保：6名、小学校：12名、中学校4名、
学校教育課2名、計26名

準備 ワークシート等

■講義「治るということ～治癒像とは～」

講師：大洗町教育センター副センター長（臨床心理士） 水口 進 先生

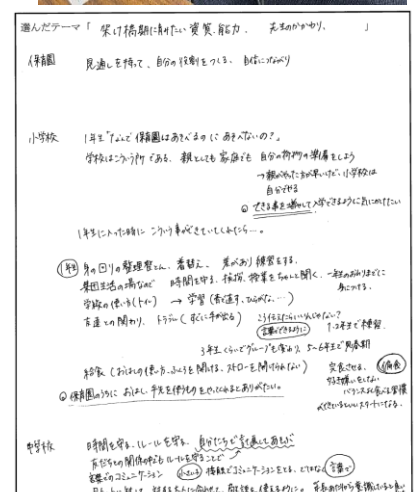
- 1 幼児期と学齢期の子どもたちの特性について
 - ・応用行動分析について
 - ・正負の強化と弱化
 - ・児童の「問題行動」の原因帰属
- 2 発達障害について
 - ・家庭教育について
 - ・発達障害の具体



■協議「架け橋期について」

4つのテーマを設定し、保育者と小・中学校の教員をミックスしたグループで、テーマを選択して話し合いを進めた。

- (1) 架け橋期に育みたい資質・能力
 - ・自分を大切に、相手も大切に
 - ・自己肯定感を高めるためのかかわり
 - ・自発的、自分で選び取る姿勢
- (2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
 - ・集団活動ができる
 - ・静と動のメリハリをつける
 - ・時間を見て動ける
- (3) 架け橋期の先生のかかわり
 - ・（年中担当保育者）座り方の指導
離席できないことやトイレに行きたいときは前もっていう
 - ・自分で考えて行動できるように支援
 - ・静かに手を挙げる練習
 - ・達成できる課題の設定
- (4) 環境の構成
 - ・家庭の子どもとのかかわり方を考える
 - ・食育の重要性（偏食への働きかけ）
 - ・コミュニケーション（集団活動）の重要性



保育者・小・中学校教員が架け橋期についての考えを共有するよい機会となった。今後、大洗町で活用している「アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム」をバージョンアップして、「大洗町架け橋プログラム」を作成していきたい。

保幼小の連携について

～特別な配慮を要する幼児の就学支援についての実践～

常陸大宮市



特別な教育的支援を要する児童生徒が近年増加傾向にあり、新学齢児についても入学後を見据えた支援の在り方の検討が求められている。そこで本市においては、幼児や保護者が安心して就学できるよう、保幼小が連携して学びの場の検討を行うことができるよう取り組んでいる。

■ 配慮を要する新学齢児の把握

配慮を要する新学齢児を把握するため、市内全幼児教育施設に対し、就学相談対象者表の作成を依頼した。6月時点で、48名の幼児が対象者となっている。その後、就学相談をとおりて教育支援委員会の承諾を得られた幼児については、調査員が調査をすすめている。

- 配慮を要する幼児についての情報を早めに知ること、円滑に就学相談ができた。

■ 合同研修会の開催

参加者 小学校 11 名、中学校 4 名

私立保 3 名、私立こ 8 名、公立保 2 名、公立こ 1 名、こどもセンター心理士 1 名
学校教育指導員、教育委員会指導主事

教育支援委員会の開催に際し、調査員である小中学校の教員と幼児教育施設の保育者に参加を依頼し、就学支援について共通理解を図るための合同研修会を実施した。情報共有を行い、就学支援について共通理解を図ることができた。

- 新学齢児の調査を小学校教員である調査員が行うようにしていることで、小学校入学後を見据えた連携を図ることができた。

■ 「指導室訪問における授業公開の実施」

各小中学校における指導室訪問の際に、幼児教育施設に対し、各学校から案内を送付するなどして、保育者が小中学校の授業参観を行うことができる機会を設けた。小学校第 1 学年の授業を参観する幼児教育施設保育者が多く見られた。

- 配慮を要する児童等全ての幼児、児童、生徒の切れ目のない支援や学びの連続性を意識した指導をするための、教師や保育者の学びの場となった。

■ 交流会の実施

参加者 美和小学校 1 年生 8 名、美和認定こども園年長児 3 名

美和小学校に園児を迎え、交流会を実施した。授業参観や施設見学、授業体験を通して交流することができた。

特に授業体験では、児童が企画した活動（的当て、けん玉、鬼ごっこ等）に園児が参加し、一緒に遊びを楽しむことができた。

- 双方の教職員は、学びの連続性を実感したり、新学齢児の実態を把握したりすることができた。
- 園児は就学に向けて、期待感を高めることができた。



* 授業参観
(算数)

* 授業体験
(的当て遊び)

幼児教育施設の保育者と小中学校の先生方との交流の場の設定し、情報共有や支援の在り方について検討をすることができた。今後は、架け橋期のカリキュラム作成に向けて、更なる連携強化を目指したい。